

〔オキシリニック酸水和剤〕

農林水産省登録 第17203号

性状：類白色水和性粉末 45μm以下

毒性：普通物

スターナ®水和剤

危険物：—

有効年限：4年

包装：100g × 100袋、500g × 20袋

有効成分：オキシリニック酸 ……………20.0%

補助成分：ポリ(オキシエチレン)ニノルフェニルエーテル(PRTR・1種) ……3.0%



「住友化学農業ガイド」の見方：i-農カサイトの「製品情報」、「農業ガイドを見る」から、「農業ガイドの見方」をご覧ください。
本剤の最新情報：こちらのQRコードを読み取るとi-農カサイトに掲載されている本剤の最新情報をご覧いただけます。

〔適用と使用方法〕

作物名	適用病害名	希釈倍数	10アール当り 使用液量	使用時期*	総使用回数*	使用方法	
稲	もみ枯細菌病	20倍	—	浸種前	1回	10分間種子浸漬	
		200倍				5~24時間 種子浸漬	
		400倍				24時間種子浸漬	
		400~800倍 乾燥種子重量 の0.3~0.5%		48~72時間種子浸漬			
		20倍		種子粉衣(湿粉衣)			
		200倍		10分間種子浸漬			
	苗立枯細菌病	7.5倍	乾燥種粒1kg 当り30ml	浸種前		吹付け処理 (種子消毒機使用) 又は塗沫処理	
		20倍	—	浸種後		10分間種子浸漬	
		200倍		浸種前		24時間種子浸漬	
	乾燥種子重量 の0.5%	種子粉衣(湿粉衣)					
	褐条病	20倍	—	浸種後		10分間種子浸漬	
		200倍		24時間種子浸漬			
7.5倍		乾燥種粒1kg 当り30ml	浸種前	吹付け処理 (種子消毒機使用) 又は塗沫処理			
はくさい キャベツ	軟腐病・黒斑細菌病	1000倍	100~300ℓ	7日前	3回	散布	
たまねぎ	軟腐病						5回
ばれいしょ				本剤：5回 オキシリニック酸 ：5回 (#1)			
				未成熟 とうもろこし			褐色腐敗病
こんにゃく	腐敗病			14日前			本剤：5回 オキシリニック酸 ：6回 (#2)

作物名	適用病害名	希釈倍数	10アール当り 使用液量	使用時期*	総使用回数*	使用方法
こんにゃく	腐敗病	30~100倍	種いも 1m ² 当り 150m ^l	植付前	本剤:1回 オキシリニック酸 :6回 (#2)	種いも 吹き付け処理
たばこ	空洞病	1000~1500倍	25~180ℓ	10日前	2回	散布
茶	赤焼病	1000倍	200~ 400ℓ	摘採 7日前まで		
にんじん	軟腐病 斑点細菌病		100~300ℓ	7日前	3回	
だいこん	軟腐病	14日前		5回		
カリフラワー				2回		
ブロッコリー	黒斑細菌病	前日			3回	
はなっこりー ピーマン	軟腐病					
レタス	斑点細菌病	7日前		2回		
非結球レタス	軟腐病 腐敗病	14日前				
トレビス	萎凋細菌病	3日前				
セルリー	軟腐病	1000倍		14日前	3回	
ねぎ						
らっきょう		2000倍	7日前	2回		
チンゲンサイ						
さんとうさい						
エンダイブ	2000倍	14日前	2回			
パセリ						
アスパラガス			100~500ℓ	前日	3回	
ズッキーニ	軟腐細菌病	100~300ℓ				
なし	枝枯細菌病	1000倍	200~700ℓ	45日前	3回	
もも	せん孔細菌病					
ネクタリン	かいよう病			7日前		
小粒核果類 (すももを除く)						
すもも	黒斑病					
きく	斑点細菌病	100~300ℓ	—	5回		
カラ	軟腐病	30倍	球根 100kg 当り 1~3ℓ	定植前	1回	球根吹き付け処理

#1: 種いも浸漬は1回

#2: 種いもへの吹き付けは1回、植付後は5回



効果・薬害等の注意

- 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきる。
- 浸漬処理の場合は、粗と薬液の容量比は1:1以上とし、種粒はサラン網など粗目の袋を

用い、薬液処理時によくゆする。

- 長時間浸漬の場合は、浸漬処理中に1～2回攪拌する。
- 粉衣処理は付着をよくするため、湿粉衣とする。
- 薬液処理した種籾は、風乾後、水洗いせずに浸種する。
- 消毒後の浸種は水槽で行い、水の交換は原則として初めの2日間は行わない。
その後水を換える場合は静かに行う。
- 稲に吹付け処理する場合、種子消毒機を使用し、種籾に均一に付着させて乾燥する。
また、塗沫処理の場合は、適当な容器内で種籾を攪拌しながら、薬液を滴下するなどして、種籾に均一に付着させる。
- カラーに吹き付け処理する場合、噴霧器を使用し、球根全体に薬液を付着させる。
また、薬剤処理後、風乾してから球根を定植する。
- 野菜類の細菌病に使用する場合、多発条件下では効果が劣る例もみられるので注意する。
- 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤をはじめて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用する。
- 本剤の使用に当たっては、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。



安全使用上の注意



- 誤飲、誤食などのないよう注意する。
誤って飲み込んだ場合には吐き出させ、直ちに医師の手当を受けさせる。
本剤使用中に身体に異常を感じた場合には、直ちに医師の手当を受ける。
- 本剤は眼に対して弱い刺激性があるので眼に入らないよう注意する。
眼に入った場合には直ちに水洗する。
- 使用の際は農薬用マスク、不浸透性手袋、長ズボン・長袖の作業衣などを着用する。
また散布液を吸い込んだり浴びたりしないよう注意し、作業後は手足、顔などを石けんでよく洗い、うがいをする。
- 直射日光をさけ、なるべく低温で乾燥した場所に密封して保管する。
12頁記載の注意事項、(1)、(2)、(3)、(4)－Cも合わせてお読み下さい。

〔品目特性〕

- 作用機作は細菌のDNAの複製阻害によるものと考えられています。
- グラム陰性菌に効果がありますがグラム陽性菌には効果が期待できません。
- 予防的な散布で効果があります。
- 散布のほか、稲の種子消毒（種子浸漬、種子粉衣、吹き付け又は塗沫）、こんにゃくの種芋消毒に使えます。
- もみ枯細菌病防除には出穂直前と出穂5日後の2回散布すると効果が安定します。